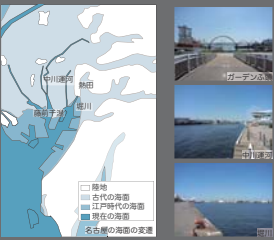


うみ、そら、まちをつむぐ場所

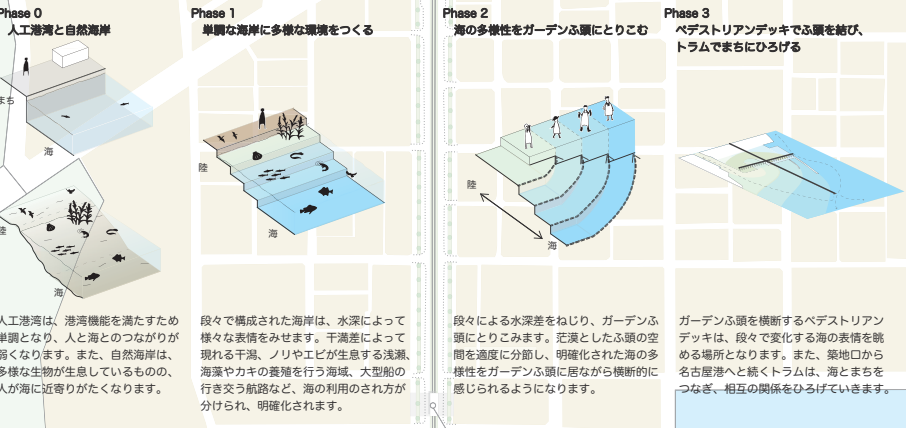
古代、名古屋の海岸には湿地が広がり、豊かな生態系が育まれていました。その後、江戸時代の新田開墾による干拓や明治以降の産業振興による埋め立ては、経済的発展をもたらしました。一方で、元来海が持つ多様な表情や、海との関わりを人々は忘れつつあります。

名古屋周辺の海には、渡り鳥の飛来地として有名な藤前干潟や、アサリの生産量が全国一位を誇る三河湾があります。周囲に残るこのような海の姿を参考にしながら、私たちは都市化が進んだ名古屋港ガーデンふ頭を海の表情や生物、使い方が多様な場所にします。

2010年は、世界型開港港が定めた「国際生物多様性年」です。10月には、第10回目となる生物多様性条約の締約会議（CBD・COP10）が名古屋で開催されます。私たちは、名古屋港ガーデンふ頭をモデルケースとして、都市港湾における生物多様性のあり方を問いたいと思います。



■海の多様性をつくる、とりこむ、ひろげる



人工港湾は、港湾機能を満たすための単純となり、人と海とのつながりが弱くなります。また、自然海岸は、多様な生物が生息しているもの、人が海に近寄りたくなります。

段々で構成された海岸は、水深によって様々な表情をみせます。干満差によって現れる干潟、ノリやエビが生息する浅瀬、海藻やカキの養殖を行う海域、大型船の行き交う航路など、海の利用のされ方が分けられ、明確化されます。

段々による水深差をねじり、ガーデンふ頭にとりこみます。干満としたふ頭の空間を適度に分割し、明確化された海の多様性をガーデンふ頭に居ながら横断的に感じられるようになります。

ガーデンふ頭を横断するペDESTリアンデッキは、段々で変化する海の表情を眺める場所となります。また、築地口から名古屋港へと続くトラムは、海とまちをつなぎ、相互の関係性をひろげていきます。

